

Fastly + 株式会社ぐるなび

飲食店情報サイト「楽天ぐるなび」の中核となるデータドリブン経営の実現を支えるFastlyのエッジクラウド

飲食店情報サイト「楽天ぐるなび」を中核に、「食でつなぐ。人を満たす。」というブランドステートメントに基づき、飲食店のため、ユーザーのため、食の未来のための「飲食店 DX のベストパートナー」を目指す株式会社ぐるなび（以下、ぐるなび）。同社が推進するデータドリブン経営を支える Fastly のソリューションについて、ぐるなび CTO の岩本俊明氏に、Fastly株式会社（以下、Fastly）カントリー・マネージャーの今野芳弘が話を聞いた。

データに基づく知見やノウハウの有効活用で飲食店のオペレーションを劇的に変革

今野：ぐるなびでは、2024年3月期から2026年3月期までの3カ年の中期事業方針で「飲食店 DX のベストパートナー」を目指した取り組みを展開していらっしゃいます。まずは会社の紹介と具体的なDX推進についてお聞かせください。

岩本：ぐるなびは、飲食店情報サイトである「楽天ぐるなび」を運営している会社というイメージが強いと思いますが、飲食店情報サイトは事業の1つで、現在は飲食店向けのDX推進を支援するさまざまなサービスを提供しています。

例えば、飲食店を訪れたお客様が自身のスマートフォンで注文ができるモバイルオーダーシステム「ぐるなび FineOrder（ファインオーダー）」というサービスを提供しています。このサービスを利用することで、飲食店はフロア担当者不足を補うことができ、お客様は自分の好きなタイミングで注文できるので、フロア担当者が来るのを待つストレスがありません。

また専用のオーダーシステムを使うとデバイスの故障などの問題が発生するリスクがありますが、お客様自身のスマートフォンを利用できるのでこうしたリスクも回避できます。さらに、これまでぐるなびが蓄積してきたデータに基づく知見やノウハウを有効活用し、飲食店のデータと連携することで、飲食店のオペレーションを劇的に変革することも支援できます。

今野：飲食店とお客様、双方の満足度向上にフォーカスされたDXサービスを提供されているように感じました。現在ビジネス的にはどれくらいの成長を遂げているのでしょうか。

岩本：現在、月間のユニークユーザー数（UU）が3200万人（2023年12月時点）、総有料加盟店数が4万2150店舗（2024年3月時点）です。この規模でアクセスがあるので、かなり多くのお客様に利用されていることが分かると思います。



Interviewee (Left)
株式会社ぐるなび
CTO
岩本 俊明 氏

Interviewer (Right)
Fastly株式会社
カントリーマネージャー
今野 芳弘

社名:株式会社ぐるなび

1989年10月、交通広告代理店業務を事業とする株式会社交通アドとして設立され、2000年2月に現在の社名に変更。パソコンやスマートフォンによる飲食店の情報提供サービス、飲食店の経営に関わる各種業務支援サービスの提供、その他関連サービスの提供を事業として展開。2023年10月より、中核事業である飲食店情報サイト「ぐるなび」の名称を「楽天ぐるなび」に変更している。

住所：〒100-0006

東京都千代田区有楽町1-1-2 日比谷三井タワー 11F

URL：<https://corporate.gnavi.co.jp/>

fastly



ロングテールのアクセスに対し、ストレスなく高速にアクセスできる仕組みが必要

今野：現在、Fastly のコンテンツ配信ネットワーク（以下、CDN）を利用していただいておりますが、導入前に抱えていた技術的、ビジネス的な課題について伺えますか。

岩本：情報をサイトの利用者に高速に提供するためには、CDN は欠かせない技術です。Fastly 導入前にも、各社の CDN をぐるなびのサービスに合う形に何度もアップデートしながら利用していましたが、「生きた情報」をリアルタイムに CDN にキャッシュすることが困難でした。そこで、新しい情報が出たら古い情報をすぐにページ（消去）して、常に最新の情報をキャッシュできる仕組みが必要でした。

一方、ビジネス的には、いかにロングテール（稀にアクセスされるコンテンツ）に対するキャッシュ効率を最大化するかが課題でした。「楽天ぐるなび」のアクセスは、ニュース記事のように 1 つの記事が出たときにその記事にアクセスが集中するのではなく、北は北海道から南は沖

縄まで、日本全国の飲食店に対し、さまざまな場所からのロングテールコンテンツへのアクセスに対し、お客様がストレスなく、高速にアクセスできる仕組みが必要です。

ニュース記事のような静的コンテンツであればこれまでの CDN でも問題ないのですが、「楽天ぐるなび」のようなアカウント情報に基づいて飲食店が選択され、画像やメニューなどが変動する動的コンテンツを効果的にキャッシュするためには、静的コンテンツが高速に表示されるのはもちろん、動的なコンテンツもキャッシュし、更新が行われたタイミングで高速にページ可能な Fastly CDN が最適でした。

これまでの WAF は誤検知が多く、設定も複雑で常に専任エンジニアの監視が必要

今野：ビジネスが成長していくためには、セキュリティ対策も重要な取り組みになります。ぐるなびでは、セキュリティに対してどのような取り組みを実施されているのでしょうか。

岩本：これまでは、ファイアウォールなどの一般的なセキュリティ対策を実施してきました。しかし攻撃手法も日々変化するので、常に攻撃を監視する専任のエンジニアが必要で運用に手間とコストがかかり、クラウドを活用して新しいサービスを迅速に提供するというビジネスモデルの維持が困難になっていました。

また正規のアクセスと攻撃を見極めるにも、かなりの時間とリソースが必要で、手作業と目視で監視するのは不可能になっていました。そこで外部からの攻撃の防御は WAF のような技術にまかせ、新しいサービスをより柔軟かつ迅速に開発することに専念できることが重要になっています。

今野：Fastly Next-Gen WAF を導入する前にも WAF を利用されていたと思いますが、どのような課題があったのでしょうか。

岩本：クラウド WAF を導入していましたが、常に専任のエンジニアが監視することが必要でした。また設定が複雑で、誤検知が多かったため、かなり慎重に使っていました。ウェブサービスを提供する会社として、お客様に快適なアクセスを提供することが重要で、誤検知によりアクセスできなくなることは機会損失につながります。

また攻撃によりサイトの負荷が高くなり、不安定な状態でアクセスできなくなることも機会損失につながります。攻撃をうまく防御しつつ、正規のお客様だけアクセスさせることに日々格闘していました。これはどこのウェブサイトの管理者も同じだと思います。

NG-WAF でセキュリティ設定とアプリ開発を切り離すことで開発効率を向上

今野：Fastly NG-WAF（以下、NG-WAF）を導入されて変化はありましたか。

岩本：導入後、悪意のあるアクセスは確実にブロックされています。これまでは、攻撃は成功していなくてもサイトに到達している可能性がありましたが、NG-WAF 導入後は悪意のある攻撃がサイトに到達して、サイトが不安定になることも防いでいます。コスト面でも、単純な導入コストだけでなく、エンジニアが専任で監視する必要がなくなったので、工数の面でもメリットがありました。

今野：あまりチューニングをせず、ブロックモードで導入し、誤検知もなく稼働しているのでしょうか。

岩本：いまのところ誤検知はなく、検知はしたけどもブロックはしていないアクセスも把握できます。日々のしきい値のチューニングも、これまでは専任のエンジニアが必要でしたが、レポートを見ながらチューニングできるので、専任のエンジニアがセキュリティ対策から解放され、本業に専念できるようになりました。

今野：NG-WAF がしっかりと守ってくれているのは、ビジネス的にはどのようなインパクトがあるのでしょうか。

岩本：ウェブサービスの利用者は、個人情報や預け、それに基づいて会員サイトの利用やポイント取得などのメリットを享受できます。その情報を守り、安心・安全な利用環境を提供することは、ウェブサービス提供事業者の使命です。NG-WAF で、安心・安全なサイトであることを保証しているからこそ、お客様は安心して利用できます。

一方、セキュリティを厳しくし過ぎると使いにくくなり、アプリケーションの開発速度も遅くなります。ビジネス的に守るべき柱の1つがセキュリティですが、NG-WAFで自動化することで、セキュリティの設定とアプリケーションの開発を切り離し、疎結合のような状態で利用できるため、開発効率の向上にもつながっています。

今野: 開発の効率化という話がありましたが、開発環境を整えるために Fastly のソリューションがどのように役立っているのでしょうか。

岩本: Fastly のエッジクラウドサービスを利用することで、キャッシュ効率が向上し、負荷が軽減するなど、サイトの安定性につながります。サイトが安定することで、利用者は高速にアクセスができるので満足し、エンジニアは本業に専念することができ、安心して作業できるので業務効率も向上します。

業務の効率化により、例えばデプロイの回数を増やすこともできます。サイトを安定させることは、お客様にとっても、エンジニアにとっても重要です。セキュリティも同様で、インシデントが発生しないように Fastly が自動で防御してくれることで、エンジニアは開発スピードを向上することができます。

リソースのオフロードにより単純計算で100台のサーバーを20台に削減可能

今野: Fastly では、エッジクラウドプラットフォームとして、コンピュート、オブザーバビリティ、ネットワークサービス、セキュリティの4つのコンポーネントを提供しています。Fastly のエッジクラウドプラットフォームをどのように見えていますか。

岩本: Fastly のエッジクラウドプラットフォームは、リソースをオフロードできるので理にかなっていると思います。アプローチとして、自社サイトの手前でブロックしたり、処理したりすることは、結果として自社サイトのリソースの効率化につながります。自社のバックエンドで処理をすると、バックエンドのリソースを増やす必要があります。

忘年会や新年会などのアクセスが集中する繁忙期に、自社サイトの手前で処理できれば、バックエンドの限られたリソースを有効に活用することができます。Fastly が持っている膨大なコンピュートリソースを利用することで、突発的な大量処理（スパイク）の発生時にもサイトのパフォーマンスを維持することができるので安心です。

現在、弊社のシステムはハイブリッドクラウドを利用していますが、クラウドはオートスケールできるものの、使った分だけコストがかかるので無限にスケールすることはできません。そこである程度ユーザーの負荷を考えながらスケールする設計が必要です。Fastly のエッジで処理ができれば、クラウドのリソースのサイジングも容易になります。オンプレミスはそもそもスケールしにくいので、エッジクラウドが有効です。

今野: Fastly を利用することで、御社の DX が推進された事例があればお聞かせください。

岩本: 例えば、前述のファインオーダーは店から紙を無くし、顧客自らオーダーできるという画期的な DX です。そしてこのシステムの画像は、すべて Fastly の CDN を使ってキャッシュしていますが、実体験としてかなり高速に表示できるので、お客様はストレスなく注文することができます。紙のメニューは変更には手間がかかりますが、ファインオーダーであれば容易に変更も可能です。今後、更にリアルタイム性が求められる処理に関しても Fastly の CDN を活用していこうと思っています。

Fastly の CDN は、ページが150ミリ秒程度の単位で可能なので、画像以外の動的コンテンツのキャッシュにも利用できていると思っています。これを実現できればより高速になり、さらに使いやすくなります。今後、トランザクション量も増えていくので、エッジにオフロードする事により、コストパフォーマンスもかなりよくなります。

コストパフォーマンスがよくなり、サービス品質が向上すれば、飲食店の視点で注文の機会損失がなくなり、利用者の満足度が向上します。そこをサポートできるのが Fastly のエッジクラウドであり、飲食店の DX 推進につながっていると思っています。

今野: リソースのエッジへのオフロードで、どれくらいのコストパフォーマンスが期待できるのでしょうか。

岩本: 感覚的ですが、倍以上の効果はあると思います。例えば、エッジへのオフロードでキャッシュヒット率が80%だったとすると、単純計算で100台のサーバーが20台で済むことになり大幅なコストダウンを図れます。一方クラウドでは、無制限にオートスケールするとコスト的に問題なので、初期値を50台にして、オートスケールで100台になるように上限を設定します。もし、それを超えるスパイクが発生した場合、処理できなくなります。スパイクによるシステムダウンを防ぐことができるのはキャッシュしかないと思っています。



他社にない技術的にもワクワクするサービスを提供し続けてくれることに期待

今野：最後に、今後の Fastly に対する要望、期待などをお願いします。

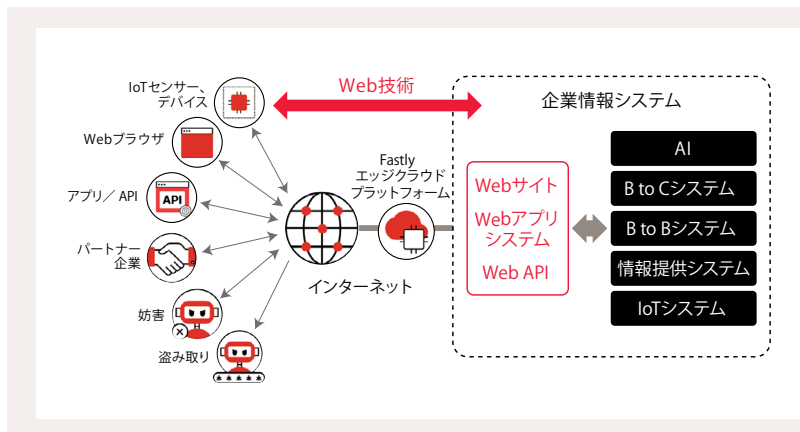
岩本：Fastly のサービスは、自分たちには作ることができない、他社にないサービスです。技術的にもワクワクするサービスが多く、開発のスピード化、効率化を実現するために、必要なサービスを提供してもらえることが強みだと思っています。例えば、CDN はたくさんありますが、動的に生成されるコンテンツを効率的にキャッシュし、リアルタイムでページ可能な CDN は多くありません。

今後もサービス開発以外の時間と工数をかけられない部分を、きれいにオフロードできるサービスを提供し続けてほしいと思っています。進化した Fastly のサービスを利用することで、「楽天ぐるなび」のサイトを進化させ、飲食店の DX 推進を支援していきたいと思っています。

今野：今後も Fastly のお客様がワクワクし、安心してオフロードできるサービスを提供していきたいと思っています。本日は、ありがとうございました。



Fastlyが目指すエッジクラウドプラットフォームとは？



エッジクラウドプラットフォームは、パブリッククラウドをセントラルクラウドとみなしそれに対比する用語で、より顧客環境に近い場所に位置するクラウドを指します。つまり、企業のシステムとセントラルクラウドの間に入るクラウドです。大きく分類するとネットワークサービス（CDN、ロードバランサー）、セキュリティ、コンピューティング、オブザーバビリティ（可視化）の機能を有しています。またそれらは一つのプラットフォーム上に構築されており、各企業で必要な機能をお使いいただけます。

お問い合わせ



✉ japan@fastly.com

🐦 @FastlyJapan

🌐 www.fastly.com/jp

📘 @FastlyEdgeCloudJapan

fastly

ぐるなび

© 2024 Fastly, Inc. All Rights Reserved